

## 状況に即したアプローチ アトリエ・ケンプ・ティル

参照 | 本誌 pp.5-7

ジスラン・マーハーによるウインター・サーカスの建物の改造は多くの点で感銘を与える。彼はまず、屋内正面にあった木造の特別観覧席をプラスター装飾や偽天井とともに取り外し、円形の建物をむき出しのコンクリート躯体とするラディカルな決定をした。結果として、彼は巨大なアトリウムを創出し、そのがらんどうの空間を活動の焦点に据えた。その後彼は段階的に、メイン・ヴォリュームの屋内外にスロープや増築を加え、基本的に全フロアに車両を乗り入れ可能にした。

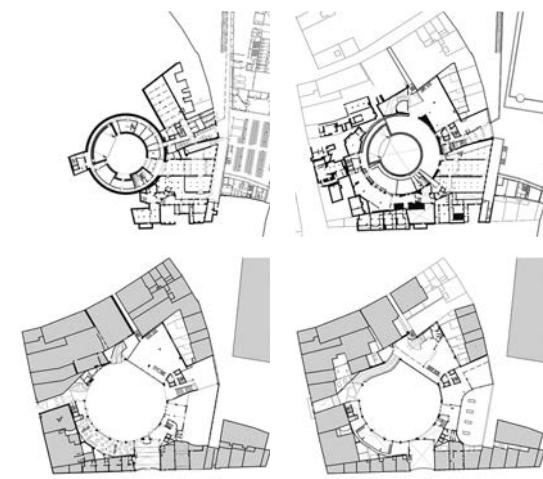
都市中心部の複雑な立地と、さらに複雑な地形および既存の都市との関係性のため、真に明快で体系的なアプローチは不可能であった。その代わり、建物全体は一見して混乱を極め、幻影的なコラージュが一斉に生じた一種の「メルツバウ」のようで、1920年代にドイツのダダイスト、クルト・シュヴィッタースの作品を想起させる。マーハーは可能とあれば単純な増築を行い、必要最低限の天井高やスロープの曲線半径あるいは急勾配にあまり関心を払わなかった。建築許可などの法律関係にも真面目に取り組んでいない。現に、彼の改造計画のいくつかは、工事終了後になって当局の規制を受けている。これに対して、彼が全労力を傾けたのは、空間を「近代消費主義を打破する状況の構築に参与する」「シチュアシオニスト」的手法で活用することにより建物で営まれる活動すべて

を利するような、繊細な連結をつくり出すことであった。

マーハーのアーネークーな増築工事は狂ったような状況をもたらした。例えば、近隣の建物との境界は基壇と上階とで異なり、あるいは、建物の一部が道路の公的領域の地下まで延びていた。彼は具体的な技術的問題を解決している。例えば、建物ごとムインクスヘルデ川に滑り落ちる危険があったため、戦略的に吟味された見えない場所に巨大なコンクリート柱を立てて、そこに建物全体を固定した。

マーハーの計画全般はフランドルの思考方法を映し出しているように思われる。モダンであることが——いかなる矛盾もなく——小空間への強い好みと手に手を携えている。この態度は大昔からの職人的熟達の精神とディテールへのほとんど物神崇拝的愛に根差すように感じられる。また、この増改築のすべては、都市ブロックの内側に隠れた、街並みから完全に遮断された場所で行われた。古いサーカスの建物に入った人々は、予想もしなかった記念碑的規模に向き合った時に圧倒的な空間的驚きに晒されるのである。

2000年に自動車コレクションが他の場所に移されると、建物は放棄された。ヘント市の要請を受けて、2005年に都市開発会社のソヘントが建物を取得した。ソヘントはこの建物に新しい命を与えるために設計競技を行い、2012年にアトリエ・ケンプ・ティルとアンノ・アーキテクツのチームが勝利した。設計競技で示された設計プログラムは、500人収容可能なロック・コンサート会場、視覚障



各階平面図

碍者向け図書館、フランドル・メディア・アーカイブ(VIAA)、そしてIT企業アイキューブ社屋であった。旧サーカスの建物は保護指定登録がなかったが、都市環境として保護指定された街路空間の一部である。なお、屋内の改築は、建築遺産保護局と議論して合意を取る必要があった。

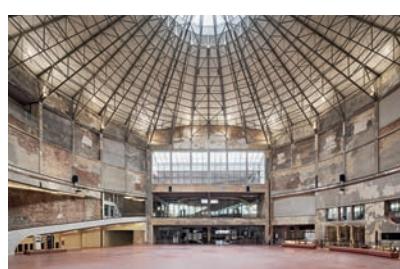
主要デザインの1つめの特徴は、非常に巨大で公共の広場の規模を持つかつてのサーカス空間に関係する。そこを設計プログラムのいすれかで埋めたり建築ボリュームを増築したりする代わりに、われわれはこの空間に手を加えず保存し、完全に空洞のまま残すことを提案した。そこは改変できない公共空間として扱われ、都市の三方と、またプラットベルクにRCR/クセー・ゴリス・ユイグ・アーキテクテンが設計した新築のデ・クローケ図書館



空からの全景



断面パース



1階アトリウム

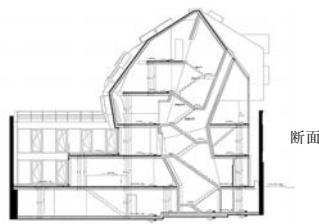


スロープよりアトリウムを見る

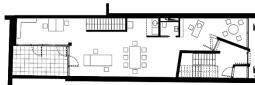
無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

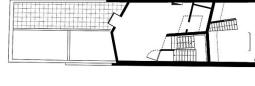
©2023 Architects Studio Japan



断面図



各階平面図



えるのは、諸法規が拋って立つ盲従的な凡庸さと、「法律」の見境なき効力なのである。

作品:ケルンの合法=違法 | 設計:マヌエル・ヘルツ・アーキテクツ

設計チーム:Emmanuelle Raoul, Sven Röttger

規模:延床面積 400 m<sup>2</sup> | スケジュール:計画 2004年

所在地:Cologne, Germany

### 「マインツのシナゴーグ」 Mainz, Germany

設計:マヌエル・ヘルツ

### 2010——ユダヤ性

参照 | 本誌 pp.26-41

ショファーとエルーヴは慣れ親しんだ用語である。「角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた」、そしてモーセに率いられてシナイ山の麓に立った(『出エジプト記』19)。この音は、牡羊の角でできたショファーから出る音に似ていた。シャガールもこれを何度も描いている。図版に載せた、現在パリに展示されている『ショファー』はその一例である。

「エルーヴ」とは、シャバット(休息の土曜)とヨム・キブル(贖罪の日)の期間中に私的空間から公的空間に物を運ぶことを禁じたユダヤの戒律である。そのため世界各地の都市のユダヤ共同体では、挿図[本誌p.26, Figs.2, 3]に見られるように、エルーヴに備えて簡素な紐を張り渡して「囲い」を作り、私的空间を仮想的に拡大することで、戒律を破らないようにする。ショファーの形態から派生したのが、角笛の音のように東から射しこんで、トーラーが読み上げられるビマーと呼ばれる祭壇に落ちる光を受ける

突起であり、それはマインツに新築されたシナゴーグにも見られる。シナゴーグの内部では、トーラーに書かれたのと同じ文字が壁面に刻まれている。このうち一部はペリコペ[礼拝中に唱えられる聖句]を構成しており、マヌエル・ヘルツは中世以来マインツのラビたちが詠んできたヘブライ語詩文「ピーユート」から詩句を取り出し、コンクリート壁に転写した。エドモン・ジャバースが指摘するように、「カリグラフィーは最も貴族的な生きる技芸」であり、「壁はそれを見捨てた者どもを追求する」ことをヘルツはよく知っている。この新しいシナゴーグでは、光も文字も音が変身したように上から落ちてきて、「聴かれる時も発声される時もまったく同じ」(ラシツ・ローゼンツヴァイク)言葉として果てしなく増幅される。同じく果てしなく続くのは、ユダヤ教徒たちの「書物」の朗読である。文字は事物であり、書物すなわちタルムードは、失われた空間を呼び起こす中心なのである。そこからシナゴーグの設計が動き出した、とヘルツは述べる。どのシナゴーグにも言えることであるが、これは何らかの様式にもタイポロジーにも翻案されたことのない種類の建物で、その理由は遠きエルサレムという不在の表現であると同時に「共同体的傾聴」(ローゼンツヴァイク)の造形的表現でもあるためである。マインツのシナゴーグもタイポロジー的構成に対応していないが、そ



街路側ファサード



正面広場より見る:手前はナチスにより破壊された旧シナゴーグ跡

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

©2023 Architects Studio Japan

これは設計した建築家にとってある様式に行き着くものでもなければ、特異さの表現に結び付くものでもないからである。マインツのシナゴーグの輪郭はヘブライ語の「ケドウシャ」の語に由来する。これは神とイスラエルの聖性を称える祈祷の名称で、ヘルツは「その5つの文字が抽象的に建物の輪郭を形づくる」と明言している。

さらに彼は「釉薬を塗った陶板のファサードも聖典や文書の別の層を指し示す」と述べるが、その一方で、溝の入った陶板は開口部の周囲を同心的に囲み、奥行きを描き出す。トーラーの巻物を収めた聖櫃「アロン・ハコデシュ」がある空間を核として、2つの広場の間に引き延ばされた建物には、集会所、事務室、宿舎、そして共同体活動のための大ホールが置かれた。「ドイツでは、ユダヤ共同体はあまり注目されない意図により、しばしば活性化する。都市の社会的、文化的な生活において彼らが副次的な役割を果たすのは、増長する反ユダヤ主義への恐れと、また一部には、ユダヤ教徒たちが自分の家族の殺人者が生きる国で生活するという事実から生じる不名誉や恥の感情に起因する」。ヘルツはさらに続ける。「最も重要なユダヤ共同体のひとつが存在する都市に



外壁のディテール

2階のオーディトリウム

1階のアロン・ハコデシュ

「ビュート」を転写したコンクリート壁

おいて、この新しいシナゴーグが意図するのは、違った態度を喚起し、マインツのユダヤ教徒たちが社会の可視的な構成員となって自分が歴史の一部であると認識するのを助けることである」。

この狙いをシナゴーグはかなり明確に表現している。注目すべき建物であり、ここに掲載した記録資料により、各人が細部まで正確な意見を持てると考えられる。ただしそこには、さらなる考察の手がかりを提供するため立ち止まって考えるべき論点がある。シナゴーグが建設中だった2005年に、ヘルツは「ドイツにおけるユダヤ人の建築」のポリテクニクスと題する論文を発表した<sup>[注1]</sup>。この論文は彼の個性を巧みに位置付けていたためもあって、一考の価値がある。彼が提起したのは、

ドイツ連邦共和国を主体とした、ショアー【ユダヤ人大虐殺】の記憶およびドイツ諸都市におけるユダヤ共同体の存在の制度化という議論である。これらのテーマは、相当に広範な文献により扱われてきた。ヘルツによれば、現在ドイツの「ユダヤ人の建築」を特徴づけるのはアーネーと諸法規への反抗の宣言であり、それが容認されるのは政治的・文化的に許容された慣習の具体性が証明できるからである。こうした許容された少数の違反に、マインツのシナゴーグも含まれる。その位置づけに興味があれば、W・G・ゼーバルトが「積極的忘却」を論じた重要な文章を読むことを推奨したい<sup>[注2]</sup>。この問題はドイツに限らず今日の社会を深く苦しめている。なお、ヘルツはこのことを知悉しているようで、ドイツに建設された「ユダヤ人の建築」の意味を検討する前に、ある都市におけるユダヤ人の存在のおそらく最も含蓄ある表明は「エルーヴ」であると指摘しており、それは彼が建てたシナゴーグとはまったく別物なのである。実際に、エルーヴは「最大限の空間において『ユダヤ人性』を最小限しか含まない」と説明される。それこそが永続する記憶のか細くとも最も雄弁で、あらゆる建築的含意を最も持たない痕跡なのである。

### 【注】

1 — M. Herz, "The politics of 'Jewish Architecture' in Germany," *Jewish Social Studies*, 3, 2005 (<http://www.jstor.org/stable/4467714>)

2 — W. G. Sebald, "Die Zerknirschung des Herzens – Über Erinnerung und Grausamkeit im Werk von Peter Weiss (心からの悔悟:ピーター・ヴァイス作品における記憶と残酷について)," *Orbis Litterarum*, 41(3), 1986, pp.265-78.

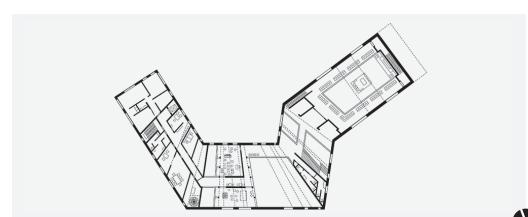
作品:マインツのシナゴーグ | 設計:マヌエル・ヘルツ・アキテクツ  
設計チーム:Elitsa Lacaze, Hania Michalska, Michael Scheuvens, Peter Sandmann, Cornelia Redeker, Sven Röttger, Sonja Starke  
建築主:Jewish Community Mainz | 規模:延床面積 2,500 m<sup>2</sup>  
スケジュール:竣工 2010年夏 | 所在地:Mainz, Germany



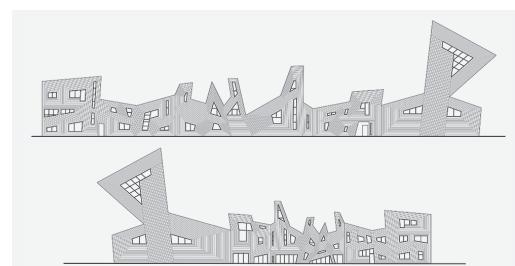
正面にメイン・エントランスを見る



背面の広場より見る



1階平面図



立面展開図



断面図

## 「バレエ・メカニック/ケミカル・ムーンベビー」

Zürich, Switzerland

設計=マヌエル・ヘルツ・アーキテクツ

### 2017——チューリヒの玩具

参照 | 本誌pp.42-53

ルーバー  
メタリックな外被は角を丸めた三角形の鎧戸で構成され、水圧式アクチュエータを動かすと開閉できる。それぞれの位置と設置された部屋に応じて、4種類の異なる要素が建物の外被となる[参照:Fig.3]。1つめは可動式手摺とともに開くと、さまざまに使えるバルコニーに変身する。2つめも可動式であるが手摺ではなく、それは太陽光から保護し、奥の部屋を暗くする機能のためである。3つめは固定され、バルコニーとなる。4つめはファサードの一部を閉じるエレメントで、他とフォルムは変わらないが、可動式ではない。これらの鎧戸を閉めると、建物はメタリックな灰色のモノクロームを帯びる。これらを開くと赤から青まで多様な色になる。立方体のボリュームには5つの住戸が置かれた。建物には正方形平面の階段室が設けられ、これが中心部を占めて4層(そのうち1層は地下)を下から上まで貫いている。頭上から照明された階段は、螺旋形に曲がりくねり、その曖昧な薄明かりは住戸内部の明るく拡散する光を予告する。内側に色が塗られ外側がモノクロームの鎧戸の位置によって、室内を照らす光の色彩が変化する。鎧戸が形づくる外被は、下階の2層に対応する。その上にはほとんどガラス張りのボリュームが載っている。この集合住宅は既存の別荘建築——チューリヒ湖畔のジーフェルト地区に建てられた、ブルジョワジーに盲従した多くの住宅の靈感源となった趣味の代表例——の近くに聳える。近隣にはル・コルビュジエ・センター(1963)も建っている。同センターは四角形を並べて構成され、その外被には彩色パネルとガラス壁が交互



北東側全景:閉じた状態



同:開いた状態



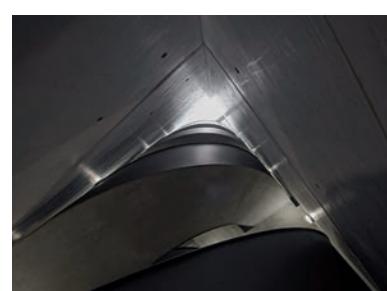
西側壁面

プロジェクト・マネージメント: Odinga und Hagen

規模:延床面積 600 m<sup>2</sup> | スケジュール:竣工 2017年

所在地:Zürich, Switzerland

に配置された。これをハイディ・ヴェバーのために設計したル・コルビュジエは、機械的に組み立てた結果として構想した。つまり、変化に応答するボリューム群を、逆勾配とされた形態的にも構造的にも独立した屋根の下に置いた。古い別荘の庭に植えられた木々の間には、まったく異なる素材で建てられた色鮮やかな「ツリー・ハウス」が見える。これら2つの「モデル」からヘルツは靈感を得た。こうして、ヘルツが集合住宅を建てた庭園の別の一角を占める典型的にチューリヒ的なヴィラの安心させる堅固な不動性に対して、彼は玩具を対置した。2,500年前に発明されたヨーヨーと似たものを、現代技術により光り輝くものに変えた。あらゆる玩具と同じく、ヘルツが設計したこの玩具も、空想力が支配的なある用途のために提供されている。この種の空想力はたいてい、玩具を住まいとは遠くかけ離れた作品に変えられるのである。



建物中央の  
階段室

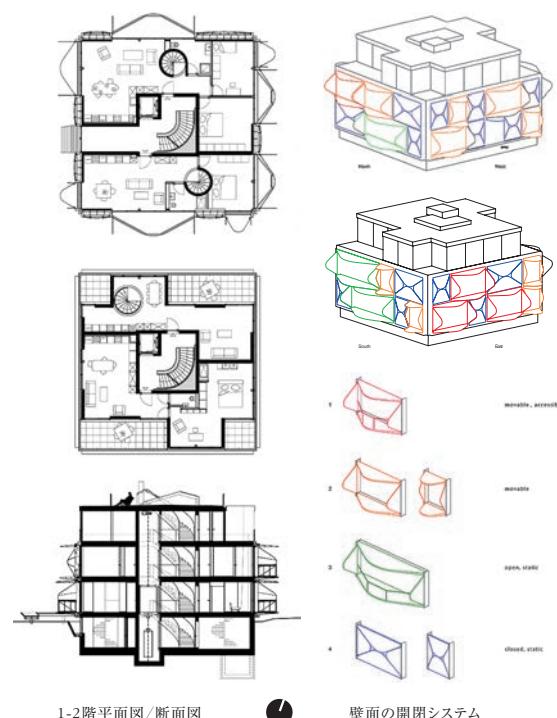
作品:バレエ・メカニック/ケミカル・ムーンベビー

設計:マヌエル・ヘルツ・アーキテクツ

設計チーム:Manuel Herz, Stefan Schöch, Panagiota Alevizou

構造・ファサード:Luchinger Meyer | 設備:MAS Engineering

現場監理:Buhler und Oettli



1-2階平面図/断面図

壁面の開閉システム

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

©2023 Architects Studio Japan

「ソーシャル・ハウジング、保育園」Lyon, France

設計:マヌエル・ヘルツ・アーキテクツ

2017—リヨン、記憶喪失の合流点にて

参照 | 本誌pp.54-58

1990年代末に、リヨンではヨーロッパで最大規模と言われた都市改造計画が始動した。対象は、ローヌ川とソーヌ川の合流点に囲まれた150ヘクタールの土地である。これは大都市圏に230万人以上が暮らす都市にとって広大な土地であり、コンフリュアンス地区に完成しつつある計画のように、再開発の対象とされる放棄された工業地帯を含んでいる。コンフリュアンス地区の場合、都市計画を管理するのは公的資金を受けたリヨン・コンフリュアンス地方公有企業(SPL)であり、計画手法は協議整備区域(ZAC)のために確立されたものである。目的はリヨンを環境的にサステナブルで魅力的な大都市にすることである。建築/著名建築家の名に狙いを定めたのは、



南側の公園より見る



東側ファサードと長手方向に伸びるコニスを見る

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

©2023 Architects Studio Japan

リヨンを模範的スマート・シティにすることを目指した、この「包括的計画」の前提のひとつであった。再開発計画の第1期は2003年に始まった。2009年にヘルツォーク&ド・ムーロンとミシェル・デヴィーニュの設計チームに第2期計画の設計が委任された。カルティエ・ド・マルシェに相当するA3区画のため、マスタープラン策定者の監督の下で設計競技と直接委任を通して建築家たちが選ばれた。この不動産開発には「インフリュアンス・スクエア」(ソーシャル・ハウジング134戸と民間賃貸100戸。オフィスと商業スペースを含む12,000m<sup>2</sup>)の建設も含まれた。その実現のため、不動産投資会社ICADE(イタリアの預託貸付公庫に相当するフランス預金供託公庫が40%出資)は設計の仕事をミシェル・デヴィーニュ(ランドスケープ)、AFAA(ローカル・アーキテクト)、ヘルツォーク&ド・ムーロン、タチアナ・ビルバオ、クリスチャン・ケレッ、そしてマヌエル・ヘルツに託した。ここに挙げたのは一部の著名人の名前であるが、多くの建築家が尽力して、コンフリュアンス地区を、都市のスマート化という目的的意味するものが何かを知り、現在の建築界における芸術の状況を認識するために訪れるべき場所に変え、また今後も変えていく見込みである。見過ごされがちな小さな土地の周辺に、インテリジェンス・ビルの傾向を強く打ち出した集合住宅が建てられ、この場所の様相は周囲に聳える建築と比べてさらに影が薄くなった。これらの集合住宅の間に、ヘルツは建築としてインテリジェンスな建物を実現した。1階には保育園がある。上層階は6戸の集合住宅とされ、それぞれ2層ずつを占める。構造グリッドに挿入されたガラス面から、大階段のように重なるテラスに出られる。ガラス面は同じ寸法の鎧戸で保護され、それを動かすとテラスが独立し、ファサードは異なる外観に変わる。ただし建物の外被すべてが可変なのではなく、ヘルツのプロジェクトを特徴づけるある原理に従っている。つまり、短辺ではコンクリート構造を剥き出しとし、簡潔な表現がもたらす両義性を巧みに用いることにより、縦溝を刻んだコンクリート仕上げと刻み目のあるコニスを調和させている。すべてのスラブの縁にこのコニスが施され、長手方向のメイン・ファサードを端から端まで横切っている。

ヘルツはこの小規模建築の輪郭をデザインするにあたり、トニー・ガルニエがリヨンに残した20世紀の傑作、ラムーシュ公営屠殺場(1909-14)の大ホール(80×120m)を16分の1に縮小して模倣したと述べている。表向きは素



北側の共有スペース

朴な声明に感じられるが、「記憶喪失の合流点」の世界ではさらに素朴な記憶さえ尊重されないのでなかろうか。その証拠に、ヘルツの最新作において真にガルニエを想起させるのは階段状の立面ではなくその内容物であり、ファサードに律動を与えるいささか規格外の歯飾りコニスが体現する、贅沢な挿入物なのである。

作品:ソーシャル・ハウジング、保育園

設計:マヌエル・ヘルツ・アーキテクツ

設計チーム:Manuel Herz, François de Font-Reaulx

構造:Cetis Ingénierie

設備:Iliade Ingénierie

建築物理:Etamine HQE

プロジェクト・コーディネート:AFAA Architecture

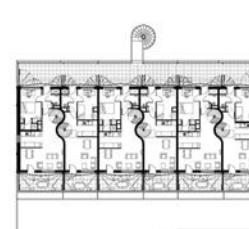
施工:Leon Grosse

建築主:SPLA Lyon-Confluence, Icade Promotion

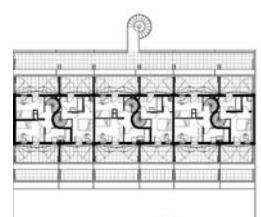
規模:延床面積 1,000 m<sup>2</sup>

スケジュール:受注 2013年/竣工 2017年12月

所在地:Lyon, France



2-3階平面図



断面図

## クラウス・シューヴェルク、クライフス+シューヴェルク:ノルウェー国立美術館

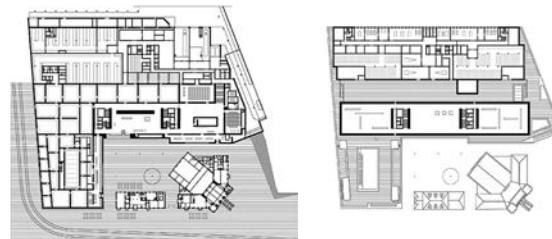
帯びるのである。

2009年の設計競技の成果を長期に渡って練り上げたすえに2022年に完成した国立美術館は、都市の変遷により積層した時間を吸収し、まとまりのある伝統を再創造した。単純な箱の組合せにおいて、ノルウェー産石材の堅固なボリューム群の上に白く光り輝くボリュームが「浮いている」。まるでアクロポリスの上に聳え立つ神殿か、正面の港に停泊するボートの向こうに浮かぶ船のようである。美術館で最も象徴的で意味深い空間であるアラバスター・ホールは、柔軟で多様に適用できる単一空間であり、ほとんど抽象的な存在である。このホールが見下ろす建物は、どちらかと言うと伝統的なタイプロジーを用いて構想された。

美術館本体を構成するボリュームはコンパクトで統一されており、革新性や多様性をあえて追及せず、むしろ地元産の石材を使いそこに新たな自然の多様性を見出している。2,500m<sup>3</sup>相当の斑岩がノルウェーのオップダール採石場から採掘され、ドイツで切削した後にオスロに戻された。切削によりざらざらした石の特性が生かされ、寸法の異なるパネルに加工された。

建物の立体的構成は屋内の伝統色の濃い空間分節に呼応したもので、低層階は古典的ミュージアムの類型的な空間構成に基づいている。

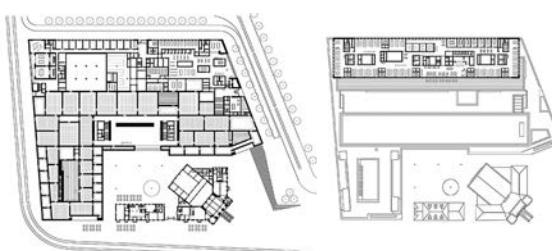
この原則に従って整然とバランスよく並ぶ空間をつて上層に向かうと、アラバスター・ホールに到着する。このホールは対位法による作曲のように、低層部と異なり完全にフレキシブルで、障害物となるのは2つの階段室の



下階の展示スペース



アラバスター・ホール



各階平面図



2階展示スペースより彫刻庭園を見る

みである。2,400m<sup>2</sup>と広大で高さは7m、長さは130mあるため、大寸法のインストレーションも可能である。単一空間として使うことも、3つの小規模ホールに分割することもできる。

ホールの外壁は薄い大理石パネルを2枚のガラス・パネルで挟んで構成される。日中は自然光を濾過して拡散させ、夜間に照明が灯ると、都市景観の中に美術館の光り輝く存在を浮かび上がらせる。簡潔なフォルムそのものが象徴記号を節約する姿勢を帶びているが、空間構成やそこでの体験の豊かさは排除されていない。こうして、透明で明るく輝くボリュームは抽象的で儚い存在として現れ、しかし同時に、市庁舎、要塞、海と対話する中でその存在を強く主張するのである。

作品:ノルウェー国立美術館

設計:クラウス・シューヴェルク、クライフス+シューヴェルク

ランドスケープ:Østengen & Bergo; Lützow7 (competition)

構造エンジニア:Ramboll

施工:HAB, AF, Caverion, Roschmann / Sedak (facade),

Hofmann Naturstein (facade), Goppion (display cases)

照明:Ramboll, Oslo; Jan Dinnebier

展示デザイン:Guicciardini & Magni Architetti

建築主:The Royal Norwegian Ministry of Culture

美術館コンサルタント:Massimo Negri, Kriterion, Milano

規模:延床面積 54,600m<sup>2</sup>

スケジュール:設計競技 2009年/着工 2014年/竣工 2022年

所在地:Oslo, Norway



空からの全景



正面ファサード

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2023 Arnoldo Mondadori Editore

©2023 Architects Studio Japan